

W. S. Learned の公共図書館論

—コミュニティ・インテリジェンス・センター構想を中心に—*

吉 田 右 子**

アメリカ公共図書館が教育サービスを開始した1920年代の図書館成人教育の状況をカーネギー教育振興財団研究員ラーネッド (William S. Learned) が1924年に *The American Public Library and the Diffusion of Knowledge* にまとめた。

公共図書館に高度な情報提供機能を求めたラーネッドはレポートの中で公共図書館の理想モデルを提示し「コミュニティ・インテリジェンス・センター」(community intelligence center) という名称を与えた。既存の図書館の状況を検討しながらコミュニティ・インテリジェンス・センター構築の可能性を追究したラーネッドの報告書は、図書館界に成人教育の重要性を自覚させると共にコミュニティにおける公共図書館の役割をめぐる議論を生起させた。彼の公共図書館サービス論は今日の成人サービスの理論的基盤を提供した。

目 次

1. はじめに
2. レポート成立の背景
 - 2.1 1920年代のアメリカ成人教育と図書館成人教育サービス
 - 2.2 ラーネッド略歴
3. ラーネッドの公共図書館論
 - 3.1 「コミュニティ・インテリジェンス・センター」構想
 - 3.2 「コミュニティ・インテリジェンス・センター」としての公共図書館
 - 3.3 レポートの評価
4. 考察
- 注・引用文献

1. はじめに

19世紀末から20世紀初頭にかけてのカーネギー (Andrew Carnegie) による図書館への慈善事業によって、全米の公共図書館数は飛躍的に増加し

その数は1917年までに約1,700館に達した。カーネギーの慈善活動を引き継いだカーネギー財団 (Carnegie Corporation of New York) は1920年代に入ってから、図書館事業の重点を図書館建設から図書館サービスとサービスに携わる人材の育成へと移行した。カーネギー財団におけるこのような図書館事業方針の変化は1920年代アメリカの成人教育の隆盛と結び付いている。財団はこの時期に、アメリカ社会における成人教育の重要性を認識し、財団事業として成人教育活動に関わっていく過程で、図書館を成人教育における中心的機関の一つとして位置づけたのである。1921年から1923年まで財団の会長代行であったプリッチェット (Henry S. Pritchett) は成人教育機関としての公共図書館の可能性を探るため、カーネギー教育振興財団 (Carnegie Foundation for the Advancement Teaching) の研究員ラーネッド (William S. Learned) に図書館調査を委託した。内部資料として財団に提出された調査結果は重要性が認められ、1924年に *The American Public Library and the Diffusion of Knowledge* (以下、レポートとする)¹⁾として出版された。

* 1997年4月1日受理

** よしだ ゆうこ 図書館情報大学

本論はレポートが現在のアメリカ公共図書館活動の特徴づけているコミュニティ志向型サービス理論を図書館学において最初に明示した著作であることに着目し、レポートの論旨を分析しながらラーネットの公共図書館思想を考察することを目的としている。

公共図書館に高度な情報提供機能を求めたラーネットはレポートの中で公共図書館の理想モデルを提示し、「コミュニティ・インテリジェンス・センター」(community intelligence center)という名称を与えた。既存の図書館の状況を検討しながら、ラーネットはコミュニティ情報センター構築の可能性を追究した。従来の図書館論が図書館側から情報サービスの改善と発展を探っていたのに対し、ラーネットの図書館論は図書館の本質的機能である知識普及という概念から図書館サービスにアプローチしていくものであり、この点がレポートの特徴となっている。

1920年代の公共図書館には、ラーネットの提言した高度な情報サービスを実践に移すためのノウハウと人材が不足していた。レポートの中でラーネットが掲げた理想的な図書館モデルと現実の図書館にはかなりの距離があったことは否めない。また当時、図書館界が最も熱心に取り組んでいた「読書相談サービス」への記述が相対的に少なかった点は、レポートに対する図書館員の反発を招いた。しかしながらラーネットのレポートが同時代の図書館界に新鮮な刺激を与えたことは事実であり、レポートの内容は公共図書館史研究において高く評価されている。ダグラス (Paul Douglass) は“(ラーネット・レポートは) 図書館学に新しい視座をもたらした。ラーネットは、個人の情報ニーズを的確に把握した専門スタッフによって機能的に組織化された〔中略〕文化普及のための情報センターとしての図書館の概念を提示した”²⁾とレポートの意義を述べている。公共図書館史研究者は、知識普及の問題に鋭く切り込み、図書館との関連づけを行なったラーネットレポートに論及してきた³⁾。

本稿では、レポートが成立した背景を同時代の図書館界の動向と重ね合わせながら明らかにした上で、ラーネットが構想した図書館モデルの概要とレポートで紹介されている1920年代の先進的図

書館サービスについて論じる。最後にレポートや先行研究をてがかりにしてラーネットの公共図書館論を考察する。

2. レポート成立の背景

本章ではレポート成立の社会的背景としてカーネギー財団の動向を中心にアメリカの成人教育と公共図書館界の状況を概観し、あわせてラーネットの経歴に言及する。

2.1 1920年代のアメリカ成人教育と図書館成人教育サービス

第一次世界大戦後のコミュニケーション・メディアの発展は情報流通を加速させ、アメリカにおいてマスメディアを通じて文学・音楽・芸術を受容する新しい生活スタイルが徐々に広がった。成人教育活動にもそれまでの職業教育に加え、歴史、文学、科学、芸術などのテーマを継続的、系統的に学習する場が求められるようになっていた⁴⁾。

アメリカ成人教育界が明確な活動指針と活動目標の獲得を模索する中で、地域の成人教育に携わる公共図書館も自らの教育理念を明確にしようとする試みを始めた。1920年代のアメリカ公共図書館の成人教育には二つの柱があった。アメリカナイズーション・プログラムと読書相談サービスである⁵⁾。アメリカナイズーション・プログラムは1910年から1920年にかけてアメリカへの移民数が延べ800万人に達した時期に開始されたサービスである。公共図書館界では移民に対し、母国語図書提供や英語クラスの主催などのサービスを実施し、公共図書館界においてサービス対象としての移民と移民コミュニティをめぐる議論が高まった。もう一つの柱は、個人の読書支援を目的としてカウンセリング形式で行なわれた読書相談サービスである。1922年にシカゴ公共図書館、デトロイト公共図書館、クリーヴランド公共図書館で始められたこのサービスは他の公共図書館にも広まり、1940年代まで公共図書館における成人サービスの中核であった。

一方、1920年代からカーネギー財団がアメリカ社会における成人教育の重要性を認識し、成人教育の制度的基盤の形成に乗り出した。1919年の

カーネギーの死去後、慈善の優先度を見直しながら成人教育領域への資金援助を検討しはじめていた財団は、1924年に成人教育に関する専門家会議を主催し、十年間にわたって300万ドルを成人教育事業に寄付することを決定した⁶⁾。財団の成人教育プロジェクトを主導したのは財団会長のケッペル (Frederick P. Keppel) であり、ケッペルは専門家会議を以後継続して主催した。その結果、1926年の会議でアメリカ成人教育協会 (American Association for Adult Education, 以下 AAAE と略記) が設立され、以後 AAAE がアメリカ成人教育の領域を統括するようになった⁷⁾。カーネギー財団は多岐にわたる1920年代のアメリカ成人教育活動の中から特定の領域に照準を合わせた政策を行なうことになった。財団は成人教育政策目標の一つを「異なる分野間の知識コミュニケーションの円滑化」に定めた。この方針は1921年から1923年まで財団の会長代行であったプリッチェットの意向により、学術情報の中でも特に自然科学系の情報流通に重点をおいて実施されることになった⁸⁾。

カーネギーは慈善の基点を誠実性、儉約精神、道徳心といった価値に置き、自らの寄付が社会全体の知識の向上のために使われることを望んでいたものの、知識普及を行なう側で知識の中身を規定することには反対していた。しかしながら財団の成人教育担当者であったルート (Elihu Root) とプリッチェットは知識の流通に関して特定のコントロールの必要性を認識し、これを財団の政策課題と重ね合わせた。また彼らは一般民衆への直接的な知識の普及よりは、専門家を介在させた情報流通体制を理想としていた⁹⁾。特にプリッチェットは成人教育に対して明確なイメージを持っていた。彼は成人教育の中心課題を自己教育の方法確立のための個人の精神的訓練と習慣の形成に加えて、知識の普及と情報の円滑な流通においていた¹⁰⁾。プリッチェットは財団の成人教育政策を進めるにあたって、知識流通における公共図書館の役割に着目し、彼が財団会長代行の任にあった1921年から1923年にかけて、図書館の問題を研究し財団の図書館政策を再検討するためにラーネッドを成人教育研究アシスタントに任命した。ラーネッドはプリッチェットの要請に応じて図書館調査を実施し、

調査結果を報告書として財団に提出した。1923年にカーネギー財団の会長になったケッペルは専門家間の知識コミュニケーションの円滑化と情報の普及に関するプリッチェットの意向を財団の方針として受け継いだ。ケッペルは知識普及のサービス・ステーションとして公共図書館を描き、成人教育の課題に鋭く切り込んだラーネッドの報告を高く評価し、レポートに対し2,000ドルの補助金を出して刊行を促した。こうした経緯を経て公刊されたのがラーネッド・レポートである。ただしケッペルは図書館側が利用者の読む図書の中身—知識—をコントロールすることができないという理由から、公共図書館が成人教育機関になることには疑問を持っていた¹¹⁾。そのためケッペルは図書館を成人教育のための情報センターにするというラーネッドの構想を財団の事業にとり入れることはなかった¹²⁾。

2.2 ラーネッド略歴

ここでレポートの著者であるラーネッドの経歴について触れておきたい¹³⁾。ラーネッドは1876年にミシガン州に生まれた。ブラウン大学に学んだ後、1909年から1911年までベルリンとライプツィヒに留学し、ベルリン滞在中にカーネギー教育振興財団からの要請によってプロイセン教育省 (Prussian Ministry of Instruction) の交換教授となった。ラーネッドはこの経験を *American Teachers' Year in a Prussian Gymnasium* にまとめ、この著作が評価され、カーネギー教育振興財団研究員に抜擢された。1912年にハーバード大学での研究を終えたラーネッドはニューヨークで、彼にとってはライフワークともいえるべき継続教育の基盤を構築する研究に着手した。ラーネッドは1913年から1946年の引退までカーネギー教育振興財団の教育研究部 (Division of Education Enquiry) のスタッフを務めた。教育学研究者としてのラーネッドの名前は大学院進学適性検査 (Graduate Record Examination) の発案者として知られている。

ラーネッドは教育研究において、学習者の能力、興味、ニーズに教育機会と教育の段階的手続きを適合させるための理論構築をめざした。このテーマは「自己教育」 (self education) の概念と深く

かかわっていた。ラーネットの研究目的は知的活動として生涯にわたり継続する自己教育習慣の向上にあり、これを達成するために自らの研究テーマを「自己教育のための教授方法の改善」に定めた¹⁴⁾。

ラーネットは自己教育について討究していく過程で、教育にかかわる「プロフェッショナルリズム」に焦点をあてた研究を行なっている。ダグラスはラーネットのプロフェッショナルリズム研究を、教育者の専門性、ライブラリアンシップの専門性、学習者の専門性という三つの段階に分けている¹⁵⁾。教育者のプロフェッショナルリズムについては1920年の著書 *The Professional Preparation of Teachers for American Public Schools: A Study Based Upon an Examination of Tax-Supported Normal Schools in the State of Missouri*¹⁶⁾ において検討されている。同書はミズーリ州を対象としたアメリカ公立学校の教員養成について論じたもので、教育者の専門性、教授法、教育者養成の問題が取り上げられた。教育にかかわるプロフェッショナルリズムの研究として次に行なわれたのが図書館員の専門性にかかわるもので、これが1924年のラーネット・レポートにあたる。つまり1924年のレポートは彼の教育研究歴においてはライブラリアンシップというプロフェッショナルリズムの探究として位置づけることができる。次いでラーネットのプロフェッショナルリズムの研究は教育を受ける側である学習者の討究へと展開された。この研究の結果が1927年に出された *The Quality of the Educational Process in the United States and in Europe*¹⁷⁾ である。同書はイギリス、フランス、ドイツの各国の学生の育成に関する調査に基づいた研究であり、この調査の過程でラーネットはヨーロッパ諸国の学生の持続的学習態度の保持という点に強く引きつけられた。ヨーロッパの学生に関する調査を通じてラーネットは学習過程の質は、学生の学習に対する真摯な精神的態度と知的生活への活力によって決定され、自己教育へのとりくみの姿勢が知識獲得と緊密に関わっているという確信を得た。また教員、図書館員、学生と進められたプロフェッショナルリズム研究を通してラーネットは、教員、図書館員、学生のプロフェッショナルリズム精神は教育プロセス

において相互に支えあうものだと認識するに至った¹⁸⁾。

図書館界とのかかわりは、カナダの教育体制について研究していたラーネットに対しカーネギー財団の会長代行であったプリッチェットが図書館調査を依頼した時点まではまったくなかった¹⁹⁾。しかしながら知的活動に携わる人材の専門性について研究を重ねていたラーネットの業績は、カーネギー財団が彼を図書館調査の適任者であると確信させるに充分であった。ラーネットは成人はいかにして日々の生活の中で学んでいくのか、成人はいかにして自分の関心に合った資料へ到達するのかといった問題意識を持って図書館調査に臨んだ。そしてレポートでは知識の普及、流通を中心にして図書館を論じていった。このようなラーネットの議論展開は、常に図書館を中心に情報サービスを討究してきた図書館界に新鮮な刺激を与えた。

3. ラーネットの公共図書館論

3.1 「コミュニティ・インテリジェンス・センター」構想

ラーネットはカーネギー財団の活動方針として掲げられた「知識の普及」について考察することから始めた。ラーネットは児童、青年、成人といった固有の知的背景を持つグループごとに知識の問題を分けて考えるべきであると主張し、知識普及における広範囲にわたる組織化と専門的な方法論の必要性を説いた²⁰⁾。

ラーネットが特に成人をめぐる知識を問題化した理由は、大多数の成人が学校卒業後に系統的なプログラムによる学習活動を継続していないという現状認識によるものであった。宗教団体、ショートカ、婦人クラブ、勤労者協会、コミュニティ・フォーラムを通じた成人教育活動はおこなわれていたものの、既存の成人教育活動は目的を欠き、活動の多くは継続に価する蓄積効果は期待できない状況だった。成人がリラックスした雰囲気の中で、学習テクニックや学習ツールを教授されるための適切な機関が存在せず、成人教育の方法が軽視され成人教育のための設備が不足していた²¹⁾。日常生活の興味と活動に密接に関係した

自己教育は、生涯にわたって継続する精神的成長の自然なプロセスとして認められなければならない。そのためには成人の学習目的に適した学習方法の開発が必要であった。また選択、編制を必要とする情報の大量発生によって、知識の合理的、経済的組織化は差し迫った課題となっていた。情報の量と複雑性ゆえに熟達した研究者でさえ、専門外の領域のトピックを調査するのに時間を要し、実際に必要な情報源に到達できないという状況がすでに1920年代にはじまっていたのである²²⁾。

ラーネッドは成人教育を討究する上での比較対象モデルとして学校教育を例に挙げ、二つの教育モデルを考察した。学校教育は知識獲得のための理論的ノウハウに基づき学習体系において特定の規範を生み出しているのに対し、成人教育には学校教育のような制約はなく、指導者は学習者の興味に応じて学習システムを組み立てていくことができる。さらに学校教育は年齢で分けられ、教授内容が均質的である一方、成人教育はコミュニティの多様なメンバーを対象とし、成人教育の興味範囲と教育の可能性は学校教育より幅広いものであり、二つの教育システムは学習に対して異なった方法論を要求している²³⁾。

知識流通に携わる社会機関の検討に移ったラーネッドは、アメリカにおいて様々な社会機関が専門的な情報を生産し資料化しているにもかかわらず、適切な伝達手段がないために必要とする利用者のもとへと到達していないという事実を重く見た。しかも利用者側でも情報要求を満たす解決方法が見つからず、情報収集において無駄なエネルギーが費やされていた。知識流通過程には課題が山積していた²⁴⁾。

ラーネッドはアメリカ社会における知識流通の現状とそこにあらわれる諸問題を提示した上で、情報機関のあり方について議論を進めた。情報機関は郵便局のごとく身近にあって印刷資料にとどまらず、あらゆる職業や商業に関わる情報収集をすべきであった。しかしながら現状は、人口5,000人規模のコミュニティにおいて、新聞、教会、映画館、婦人クラブ、日に数時間開く図書館を除いて知識と情報を扱う機関はなく、しかも新しい情報は大部分がコミュニティの外部で生産されたものであるため地域の関心と一致していなか

った²⁵⁾。ラーネッドはコミュニティが知識と情報のための活動単位となりうることを示唆して、活字情報の豊かな鉱脈に利用者を体系的に導くリーダーシップの存在の必要性を説いた。コミュニティにおける成人教育のための学習のための方法論とプロセスは、学校教育の場で採用されている方法の模倣であってはならず、成人の実質的な教育サービスを成功させるための固有のアプローチが必要であった²⁶⁾。

ラーネッドはコミュニティにおける専門的な情報サービスを、コミュニティ・インテリジェンス・サービス (community intelligence service) と命名した。ここで提起された情報サービスの目的は情報探索における動機づけを高め、情報を供給することによって利用者の興味を維持させることにあった。情報サービスは、特定領域における専門知識、特定のテーマに関する分析力、情報組織能力を必要とする専門職的業務であるとラーネッドは述べ、既存の図書館のレファレンスの方法に疑問を投げかけた。知識領域の全範囲をレファレンス・ライブラリアンが担当する方法では専門的なサービスは期待できないからである。コミュニティ・インテリジェンス・サービスの拠点となる情報センターのレファレンス・スタッフには特定領域の専門家でありなおかつ利用者のパーソナリティー、知識、利用者のおかれた状況を読み取って直感的に利用者の持つ個人的ニーズを把握する資質が必要であった²⁷⁾。またコミュニティ分析を実施して、個人及びグループの知的興味を掘り起こしながら、コミュニティの教育的問題へかわっていくような能動的な姿勢が求められた²⁸⁾。情報サービス・スタッフはコミュニティの社会的、知的、経済的生活における水先案内人である。彼らは単に特定領域の専門家であるだけでなく、情報を求めてくる人間を深く理解できる存在であらねばならなかった。ラーネッドは彼らに対し、コミュニティの情報を総括的に選択し調整する知識カウンセラーとしての役割も期待した²⁹⁾。

知識組織化の方法に論及したラーネッドは知識というものがある特定グループのみを対象とする専門的知識体系と、経験や精神構造の差異によって繰り返し再加工されうる一般的知識体系に分け

られることを指摘した³⁰⁾。成人教育の現場での知識普及は、適切なツールなしに行なうことは困難であり、情報センターにおいて初心者が各主題を概観することができるようなシラバス・シリーズの作成と提供が提案された。シラバス・シリーズに関して専門家による執筆、レファレンス機能、特定分野への適切な導入といった条件と共にオーソリティー、明確さ、存続性、簡潔性がその要件として挙げられた。ラーネッドは、成人の知的興味の95パーセントまでが印刷媒体によってカバーできると主張し、図書館員が成人教育に密接に関わっていることを強調した³¹⁾。

図書以外の有用な情報源としてラーネッドが挙げたのは情報機関が主催する講義である。大学の拡張コースと講義は大学の制度下で実施されているのに対し、コミュニティ・インテリジェンス・センターにおける講義は試験、学位といった認定制度とは無関係に、知識への純粋な興味のみによって支えられた知的好奇心を満たすための場である。ラーネッドは知識普及に有用な情報源として博物館、映画、美術、ラジオなどを挙げて各メディアの持つ特性を論じながら、多様なメディアを扱う情報機関について“(コミュニティ内の情報機関は)従来、運営面で相互に関心を持つことがなかった。博物館、図書館、美術館は個別に存在していた。[中略]しかし、学問分野にかかわるすべてのコミュニティ機関を相互に関係しあった存在として理解し表現していくことが重要である”と述べてあらたな協同関係を提唱した³²⁾。

3.2 「コミュニティ・インテリジェンス・センター」としての公共図書館

ラーネッドは情報サービスの理想モデルとして輪郭を描いてきたコミュニティ・インテリジェンス・センターは、公費運営による公共図書館を基盤として実現すべきであるとの主張を展開していく。実際に先進的図書館員は組織化すべき情報の増加を認識し、広範囲にわたる知識を効率的に利用者へと伝達するシステムの構築の必要性を理解していた³³⁾。

具体的な図書館サービスへと議論を移すにあたり、ラーネッドが最初にとりあげたのは80万冊の蔵書を持つクリーヴランド公共図書館である。同

図書館は特定分野について専門教育を受けた主題専門図書館員を起用し高度な情報サービスをおこなっていた。ラーネッドはレファレンス・ライブラリアンと主題専門図書館員に関して、前者は図書に関する一般的な援助者であるのに対し、後者は特定分野を修めた研究者であり、利用者の要求の範囲と性質を的確に把握した上で情報サービスを遂行する専門家であると説明し、両者の差異を明らかにした。クリーヴランド公共図書館において主題専門図書館員がおこなっていたサービスは、(1) 直接的な情報サービス、(2) 読書リストの作成、(3) 読書コースの作成、(4) 図書館 PR、(5) 講義の主催、(6) 出版のための資料提供、(7) 情報サービスためのコミュニティ調査など多岐にわたった³⁴⁾。クリーヴランド公共図書館の1923年の貸し出し数は延べ520万冊に達して住民一人当たり6冊に相当する高い利用率を示し、図書館は市民から高い信頼を得ていた。しかしながら学校教育に比較すれば市のクリーヴランド公共図書館に対する資金面での支出額は非常に低かった。市は小学校、中学校の学生一人あたり17ドル支出しているのに対し、図書館に対しては住民一人当たり1.54ドルの支出に留まっていたからである³⁵⁾。ラーネッドはクリーヴランド公共図書館のサービスについて“クリーヴランドの市としての向上は、市民の良書の吸収と大いに関わっている。この種の漠然とした無形の資産こそ、市を良き方向へと導く最も確実な保険である”と評価した³⁶⁾。

次に専門的サービスを活発に行なっていたいくつかの図書館が紹介された。ニューアーク・ビジネス図書館は工業、商業、商取引、銀行業に関する資料を収集しており、情報の種類は人事、電話番号帳、商業ダイレクトリー、雑誌、地図、パンフレット、クリッピング、株式情報、経済レポート、投資データ、貿易情報、統計、商法、法規に及んだ。レファレンスの数は一日に400件に達し、ほとんどは電話によるものであった。インディアナポリス図書館は教員専門図書館 (Teacher's Special Library) を学校本部に設け、教員養成教育を受けた専門図書館員が管理にあたっていた。教育関係の図書、雑誌、パンフレット、連邦政府・州の資料、他の市の教育課程、教科書、視聴

覚資料が用意され教員のためのレファレンス機関となっていた³⁷⁾。

ラーネッドは利用者側からの自発的なアクセスだけに図書館利用をゆだねる限り、図書館側から利用者への働きかけは図書館資料の整理や書架の整備といった基本的段階にとどまることになることと判断した。知識普及は利用者の入手に関する物理的便宜に依存しているがゆえに図書館員は潜在的利用者への図書の普及を考慮すべきである、つまり「図書館」機能を偏在させるためにアクセスポイントの増加に取り組まなければならない³⁸⁾。実際に図書館が図書サービスの拠点を図書館の外部に設置しサービスを実施している例として、シアトル公共図書館の移民への図書サービスと公設市場への図書の配本、スーシティ公共図書館の病院への図書館サービス、ブルックリン公共図書館の刑務所への図書サービス、フラミンガムのデニス・マニュファクチャリング・カンパニーのための分館設置、マサチューセッツ州の地下鉄駅の停本所、デイトン公共図書館やセントルイス公共図書館の図書のワゴンサービス、ウォールサムにおける在宅療養者への宅配サービスなどがあった³⁹⁾。公的機関をめぐる多くの制限を克服した結果もたらされたこのような図書館サービスの拡大は、図書館が市民生活と離反した記念碑のごとき機関から日常的な情報サービス機関へと転換しつつあることを示していた⁴⁰⁾。

次に公共図書館における成人教育を目的とした個人サービスに関して、読者担当部門 (Reader's Bureau) を設けて個人向けの読書カリキュラムの作成を行っていたシカゴ公共図書館、読書援助システムを持つデトロイト公共図書館、図書館利用者の研究活動を図書館がサポートする体制を整えサービスを実施していたニューアーク公共図書館が紹介された⁴¹⁾。クリーヴランド公共図書館の図書館クラブやシカゴ公共図書館の講演、講義、読書会活動のように青少年の図書館利用への動機づけを意図した企画もあった。デイトン公共図書館では新図書館建設にあたって研究者のためのクリアリングハウスとしての機能を考慮した。ラーネッドは図書館に関わる成人教育の現状をミルウォーキー公共図書館における調査結果に基づいて分析している。ミルウォーキーにおける成人教育

は次の五種類に分類されていた。(1) アメリカナイズーションのためのクラス、(2) 労働組合関係の教育クラス、(3) 商店や工場の教育部門、(4) 教育関係のクラブと教会の組織、(5) 大学拡張コースと高校の夜間コースである。ミルウォーキー公共図書館は (1) (2) の成人教育クラスに積極的に関わり、図書館を活用した学習が進められるよう各コースにおける図書館利用を促進し、コースのための図書コレクションを準備し便宜を図った⁴²⁾。個人サービスの類型として特に強調されたのはアメリカナイズーションと図書館の関わりである。アメリカナイズーション・プログラムはこの時点ですでに図書館サービスとしての蓄積を持ち、プログラムはアメリカの社会・市民生活の安定に貢献するサービスとして認められていた。レポートではシアトル公共図書館の外国人担当課 (Foreign Division) による母国語と英語図書のサービスが取り上げられ、アメリカナイズーション運動における公共図書館の役割が強調された⁴³⁾。個人サービスとして他にクリーヴランド、ロサンジェルス、グランド・ラピッズ、ニュー・ベッドフォード、カナダのレジナの各図書館でおこなわれていたブック・ディスカッション、ブックトーク、ブック・レビュー、文学フォーラムが紹介された。また外国人クラブ、婦人クラブ、母親クラブ、学会、宗教団体、ダンスクラブ、政治クラブ、音楽団体などコミュニティの各種の団体と図書館の関係についても言及された⁴⁴⁾。

既存の図書館活動の中から特に先鋭的なサービスとして紹介されたのは (1) 個人情報サービス、(2) コミュニティ・インテリジェンス・サービス、(3) 図書館 PR、である。第一番目は個人の情報ニーズに焦点をあてたサービスであり、利用者の情報ニーズに基づいたパーソナルファイルを作成し、個人サービスを行っていたピッツバーグ公共図書館、ポートランド公共図書館、インディアナポリス教員図書館などが、このサービスの進むべき方向性を示していた。ラーネッドは住民の情報ニーズを探るコミュニティ・インタレストの分析が図書館において積極的におこなわれるようになることを想定した。コミュニティの特定の関心事とコミュニティの住人にとって個人的な価値を持つ情報ニーズとが結び付けられること

で、図書館の知識伝達機関としての影響力が高まっていく⁴⁵⁾。

第二番目の特別情報サービスとしては図書館をコミュニティの普遍的な情報資源として位置づけるものであった。このサービスには、図書館が地域情報をもれなく把握しコミュニティについての便覧となる資料を作成するといった方向が考えられた。コミュニティのイベントについて情報を提供していたセントルイス公共図書館、コミュニティ内のクラブ組織の委員や活動状況についての情報を把握し情報提供していたニューアーク公共図書館がコミュニティ・インテリジェンス・センターとして機能している公共図書館として紹介された⁴⁶⁾。ラーネッドはコミュニティにおける図書館の新しいイメージを次のように表現した。

図書館は単に図書の保管庫ではなく、各々のコミュニティが持つ特定のニーズに合わせた情報交換のための「マーケット」となるであろう。つまり図書館はたまに訪れる学習のための孤立した場所からコミュニティの実用的な情報センターへと移行する。図書館はコミュニティ住民が持つべき情報を効率よく提供することで住民を魅了する場となっていく⁴⁷⁾。

第三の方向性として示されたのは「図書館は何ができるか」をアピールすることの重要性であり、多様な手段による図書館PRが求められた⁴⁸⁾。

図書館サービスの範囲をめぐる問題に言及したラーネッドは、アメリカの総人口の半数以上が適切な図書館サービスを受けていない事実を明らかにした。小規模図書館は予算的に図書館専門スタッフを配置したり最低限の設備を整えたりすることさえ困難な状況にあり、特に人材の不足が図書館の質を低下させていた⁴⁹⁾。地方の図書館の持つ問題点に対して、ラーネッドは各地域ではじまっていた実験的試行の中に解決への手掛かりを見い出している。たとえばウィスコンシン州では州単位の図書郵送サービスに関する実験的試みが始まっていた。またカリフォルニア州では42の郡の中央図書館が4千の分館を統括するような相互協力のための体制を整備していた⁵⁰⁾。ラーネッドは公共図書館サービスの調査結果を踏まえて、コミュニティの情報流通に関する将来的な展望を以

下のようにまとめた。

活力ある情報センターにおいて、利用者のニーズにあわせて情報サービスを行なう専門スタッフが中心となってコミュニティ内の図書流通が展開されるようになる〔中略〕というイメージは、75年前には無料図書館というものが想像できなかったのと同様、現時点では不確かなものとしてしか感じられない。しかし高度な情報流通機能が一つの市において特定の機関に集約されることによって、その機関は情報を体系的かつ説得的に導く「真のコミュニティの大学」となるであろう。そしてこの機能が市、町、郡へと拡張されることによって、普遍性を持つ知的、文化的進歩への主要な手段となっていく⁵¹⁾。

ラーネッドはカーネギー財団による公共図書館設立と図書館発展にレポートの一章をあてて、近代公共図書館を概観している。初期のカーネギー図書館は図書館に講義室、体育館、ホール、美術館などの文化施設が付設されることが多かった。カーネギーは「あらゆる年齢層の利用が見込まれる包括的な教育のためのコミュニティ・センターを設立する」というビジョンを抱いていた。その目標の実現過程で、カーネギーが図書館を最も重要視した理由は、図書は民衆の知的向上に関して最も有益なツールであり、図書館は民衆の大学(popular university)であるという信念をカーネギーが持っていたからである⁵²⁾。

ラーネッドは図書館がすでにアメリカの知的生活に密着した存在であり、図書館をめぐる課題は図書館存在の是非を問うものではなく、図書館の今後の方向性にあると述べた。図書館がアメリカ民主主義社会を構築していく過程で、知識と情報の普及をめぐる重要な機関であることは揺るぎない事実であった。レポートで提示してきたすぐれた図書館サービスの事例から、図書館の高度な情報サービスは専門能力を持った人材に依拠するものであり、人的援助が図書館サービスの発展の方向性を握っていることが結論づけられた⁵³⁾。ラーネッドは専門教育を受け専門のトレーニングを積んだ図書館職員を図書館に配置して、図書館サービスの再組織化を図ることを提起した。つまり図書館専門職の職務は図書館の事務的なルーチ

ンワークとは区別されるべきであり、専門スタッフの教育は大学における専門カリキュラムと結び付けられなければならないとして、図書館教育の改革が提唱された⁵⁴⁾。

公共図書館は住民のニーズにあった教育的サービスを段階的に進めていくような機関となるべきであった。ラーネッドは他機関との協力やアメリカ図書館協会（American Library Association, 以下 ALA と略記）が供給する図書館サービスのためのツールを利用することで、小規模図書館にもまたコミュニティ・インテリジェンス・サービスの中心的機関となる道が開かれていることを示唆してレポートを締めくくった⁵⁵⁾。

3.3 レポートの評価

本節ではレポートの評価と考察を行なう。

すでに述べたように、ラーネッド・レポートは知識普及という立場から図書館を論じている。モンロー（Margaret E. Monroe）はこの点について“ラーネッドは重要な知識を成人の多様な精神構造に適合させていくことの必要性を認識していた。彼はそのための知識、情報サービスの理論的枠組みを「成人教育」ではなく「知識普及」という概念においていた”と分析している⁵⁶⁾。ラーネッドが図書館調査及びレポート執筆にあたって、常に知識の普及と情報流通を念頭においていたことは、レポートを考察する上で留意すべきポイントであろう。

ラーネッドはレポートを執筆した1924年の時点ですでに「明確な目的意識を持って教育に携わる専門職」と「専門職によって組織化された図書コレクション」の両者が教育活動全般に共通する重要な要素となっていることを十分に理解していた⁵⁷⁾。専門職への関心とプロフェッショナリズムの探究が、ラーネッドの成人教育研究者としての研究テーマと密接に関わっていることは2章ですでに言及した。プロフェッショナリズム研究は「教育者」の専門職としての資質を考察するものであり、ラーネッドがドイツ留学時代から手掛けてきたテーマであった。レポートでは検討の対象を「知的活動に携わる人材」へと拡張し、成人教育における図書館員の専門性を探っている⁵⁸⁾。図書館サービスを向上させる条件として、専門教

育を受けた図書館員の必要性を繰り返し説くラーネッドの姿勢は、彼の専門職研究に根ざしていたのである⁵⁹⁾。また組織化された図書コレクションの重要性については、レポートの中で知識の普及と関連づけながら論じられている。公共図書館における最も中心的な要素は「専門職」と「組織化された資料コレクション」であるとラーネッドは捉えていた。

ラーネッド・レポートの同時代の図書館界への影響に関する考察を進める前に、1920年代の成人を対象とした図書館サービスの状況を見ておきたい。成人教育研究者カートライト（Morse Adams Cartwright）は1920年までの図書館成人教育サービスを次のように描写している。

図書館専門職のメンバーたちは「成人教育機関としての公共図書館」という理念は公共図書館設立以来、保持されていると主張してきた。しかし成人教育が理念から活動方針を定めて実践へと移行したのは（ALA に成人教育委員会が設立された）1924年からである。図書館員たちは50年間、自らの教育的使命を語ってきたにもかかわらず、コミュニティにおいて成人教育サービスを実行するための努力をしてこなかった。その原因はヨーロッパのライブラリアンシップにあった。図書館はまず第一に図書や資料のコレクションの場であり、同時代の知的財産の蓄積場所であった。ゆえに図書館員は収集家でありコレクションの管理者であり、その使命は図書館の財産を不適切な濫用から守ることであった。〔中略〕この保管者の任務（custodianship）の伝統が長い間、教育的場面での図書館と図書館員の行動を抑止してきた⁶⁰⁾。

状況が変化し始めたのは1920年代半ばからである。1924年7月に ALA は図書館と成人教育に関する委員会の設立を決定した。設立に際しカーネギー財団は24,500ドルの寄付をおこない、委員会は財団からの補助金によって図書館と成人教育の研究に着手した。1926年に同委員会は *Libraries and Adult Education* と題する研究報告書を刊行した。委員会は報告書においてラーネッド・レポートの一節“（成人教育）活動の多くは目的を欠き、活動の大部分は継続的価値が認められるよ

うな蓄積効果をもたらしていない。〔中略〕アメリカでは成人の大多数は自己教育に欠かすことのできない「図書からの知識受容」に関する知的訓練を受けていない”という部分を引用し、アメリカの成人教育に関して多様な活動があるものの、それらは確固たる活動方針がないまま行われていることを指摘している⁶¹⁾。

ラーネットのレポートに対する同時代の図書館員の反応はどのようなものであったのだろうか。モンローは、同時代の図書館員でラーネットの構想の一部を実際に図書館サービスに取り入れていた人物としてイーノックプラット公共図書館のホイラー (Joseph L. Wheeler) を挙げている。ホイラーは1926年の『イーノックプラット公共図書館年次報告書』において三項目の目標、(1) 図書館のメイン・コレクションの主題別部門化、(2) コミュニティの関心テーマを反映した蔵書構築、(3) 専門教育を受けた図書館員の起用、を明示した。これらの計画はコミュニティ・インテリジェンス・センター構想の中でラーネッドが強調した諸点と重なっている。モンローはラーネッドの提唱する「真正なコミュニティの大学」(genuine community university) という概念が「真の大学」(Real University) という言葉でイーノックプラット公共図書館の計画の中にとりこまれていたと分析している⁶²⁾。

ラーネッド・レポートに関する図書館員の意見は賛否が入り混じった状態にあった⁶³⁾。図書館員は、ラーネッドが描き出した図書館の理想モデルは教育的傾向が強すぎると感じていた⁶⁴⁾。図書館員のラーネッド・レポートへの賛同はコミュニティ・インテリジェンス・センターの構築という大きな枠組みにではなく、図書館サービスの事例としてラーネッドの高い評価をもって紹介されたシカゴ公共図書館やデトロイト公共図書館の読書相談に対して寄せられたものであった。確かに1920年代という時代に図書館員は成人教育の意義と成人教育に関して図書館が果たすべき役割を意識し始めていた。しかしながらレポートに対する反応は、多くの図書館員が図書館における成人教育の役割を読書アドバイスという一点に集約させて認識していたことを示している⁶⁵⁾。

モンローは図書館員のレポートの反応にラーネ

ッドと図書館員の成人教育に対する考え方の隔たりを見ている。たとえば、図書館員が共感を寄せた読書相談サービスの在り方にラーネッドは完全に賛同していたわけではなかった。ラーネッドはシカゴ、デトロイト、ミルウォーキーの各図書館の読書相談部門を高く評価する一方で、読書相談を独立した部署で行なうことを理想とはしていなかった。ラーネッドにとっては読者と接する図書館員すべてが読書相談の役割を果たしていくことが望ましい状態であった⁶⁶⁾。両者の認識の差はウィリアムズ (Patrick Williams) によっても指摘されている。ウィリアムズはALA会長でシカゴ公共図書館館長のジェニングズ (Judson T. Jennings) が1924年の講演において、図書館が図書及び読書を中心にしたサービスを行なっていくことを明らかにし、ジェニングズの主張が図書館界の方針として採用された時、ラーネッドの構想は図書館界からはっきり否定されたと論じている⁶⁷⁾。以上のようなラーネッドと図書館界のサービスに対する認識の隔たりは、1920年代に図書館界が公共図書館をいかなる場所としてとらえていたのか、あるいはとらえようとしていたのかを考察する上で重要な手がかりになるだろう。すなわち図書館員はラーネッド・レポートの価値を認識した上で、みずから「印刷媒体」を扱う集団と規定し、読書を中心としたサービスに図書館固有の成人教育活動領域を見出し、サービスを展開していったのである。これに対し、ラーネッドは図書という媒体に固執せず知識全般の流通・普及や情報サービスの向上を説く立場をとった。図書館関係者ではなかったという経歴も影響したラーネッドの自由な発想は、彼の図書館論と現実の図書館との距離を作る結果を招くことになった。

ラーネッドのコミュニティ・インテリジェンス・センター構想は、現場の図書館員に拒否されただけではなかった。ラーネッドに報告書を依頼したカーネギー財団もコミュニティ・インテリジェンス・センター実現に向けたサポートを拒んでいる。財団会長のケッペルはラーネッド・レポート刊行に尽力したものの、成人教育に関する財団の政策に関しては研究と調査を中心に進めていく方法を選択した。この決定により既存の公共図書

館をコミュニティ・インテリジェンス・センターへと作り替えるというラーネットの勧告は、成人教育に関する企図であるものの物理的改革をとまなうものであるとして政策から除外された⁶⁸⁾。

しかしながらレポートの内容はアメリカ公共図書館サービス理論として今日でもなお価値を失っていない。公共図書館史研究者は“アメリカの公共図書館活動の今日の発展を引き出した重要な著作”⁶⁹⁾，“ライブラリアンシップに新しい哲学をもたらす内容”⁷⁰⁾，といった記述によってレポートを高く評価している。公共図書館における成人教育サービスの史的展開を論じたリー（Robert Ellis Lee）は、ラーネット・レポートが教育機関としての公共図書館を緻密に描写し、その可能性に対し最初に体系的な見通しを与えるものであったと評価した⁷¹⁾。またモンローはラーネット・レポートにおいて提示された情報センター構想は現実と離反したものではなかったと述べる。ラーネットが情報センターにおけるサービスとして挙げたものは、すでに一部の図書館では日常的な活動として存在していたからである。たとえば主題別部門の設置と主題専門家による情報サービスはクリーヴランド公共図書館によって実施されていた。またニューアーク公共図書館では様々な講演が企画され博物館や美術館と連携したサービスが行なわれていた⁷²⁾。

公共図書館研究において現在なおラーネットのコミュニティ・インテリジェンス・センターの概念への言及がなされるのはラーネットの構想が、図書館の持つ自己教育のための様々な機能を示し、コミュニティという単位をまとまりとしてサービスが展開されていくという公共図書館の基本的方向性を明示したこと、さらに公共図書館は柔軟性に富んだコミュニティの教育的機関であって、資料提供サービスに限定されない多様な可能性を持つことを明確に示唆したものであったからである。ラーネット・レポートは大部分の同時代の公共図書館の実践に先行した理論を示すことで、図書館の成人教育サービスに対して活動の方向性を指し示したのである。

4. 考 察

レポートは、1920年代の急速な情報増大とその結果もたらされた知識普及に関する切迫した問題の発生を背景として書かれている⁷³⁾。ラーネットはコミュニティの図書館と情報流通の間に緊密な関係性を作り上げる可能性を導き出したことで、カーネギー財団の目指していた知識流通の整備に対する一つの方針を打ち立てた。ラーネットの公共図書館論では、19世紀後半から近代公共図書館を理念的に支えてきた伝統的な啓蒙主義的思想よりむしろ公共図書館における情報収集と情報処理機能の強化が最前に掲げられ、公共図書館はコミュニティにおける情報の効率的な流通の中心機関としてみなされている。

こうしたラーネットの姿勢と、19世紀からの伝統主義に依拠しながら図書館活動を展開していた多くの公共図書館が保持していたサービス理念との間にあったずれは明らかである。また、実践的側面からみてもラーネット・レポートの提言を実行するためには情報サービスのための環境整備や専門スタッフの配置が必要だった。しかしこのような条件を満たせる図書館は現実にはごく少数であった。結果的に、コミュニティ情報センターは公共図書館の理想型として高い評価を得たものの構想の段階に留まったのである。しかしながらラーネットは同時代の情報流通をめぐる現実を鋭く見極め、公共図書館をコミュニティの知識普及の中心機関として描くことで、公共図書館が取り組むべき高度なサービス理論を図書館界に提示した。

ここでレポートが書かれた1924年という時期に再び着目してみたい。アメリカでは1920年代初頭から成人教育運動が全国的な隆盛をみている。職業教育、アメリカナイゼーション教育、婦人教育、レクリエーションといった既存の活動は拡大化し、同時にそうした活動を支えるための制度的基盤を形成しようとする気運が高まっていた。実際に全国的な成人教育組織の形成に着手したカーネギー財団は全米の成人教育の実態把握と将来的な方向を探るために成人教育関係者を招聘して会議を開催し、1926年には AAAE が発足した。また財団

は2章に述べたように、アメリカの成人教育における図書館の役割を重視しており、ラーネットの図書館調査は成人教育機関としての図書館の可能性を追究していた財団の政策の一環として遂行された。

一方図書館界では1900年代から急増したアメリカへの移民を対象とする言語教育サービスや1920年代初頭から開始された公共図書館における読書相談サービスなどを通じて、図書館独自の成人教育活動を展開していた。そして図書館界でもまた成人教育の実践を図書館活動の中に明確に位置づけるために「図書館と成人教育に関する委員会」を1924年にALAの中に組織した。レポートはアメリカ成人教育が一つのムーブメントから社会的制度として確立されようとしていた時期に産み出されたのである。

レポートで示されていたのは大多数の公共図書館の実践に先行する先端的なサービス例であって、レポートの提言は図書館の実践に同時代的に結びついたわけではない。むしろALAを中心とする図書館界のリーダーに成人教育の重要性を自覚させ、コミュニティにおける公共図書館の役割をめぐる議論を生起させた点をレポートの意義としてとらえるのが妥当であろう⁷⁴⁾。

ラーネットがレポートにおいて提示した新しい情報サービス—専門的なレファレンスサービス、読書アドバイス、学習援助サービス—は現在、公共図書館が実施している成人サービスに含まれている。またコミュニティに着目した情報サービスに関しては、1970年代に展開されたコミュニティ情報センターの理念と重なるものである。1920年代という早い時期にこうしたサービスを提唱したラーネットの先取の精神は高く評価されるべきであろう。レポートで提起された様々な構想が現実と即座に直結することはなかったにせよ、ラーネットは公共図書館の情報サービスの新しい可能性についてのモデルを提供したといえる。そして図書館界はこうした新しいサービス論と現実のサービスとの距離や実現可能性を見定めながら今日の多様な公共図書館サービスにつながるサービス理論を構築していったのである。

注・引用文献

- 1) Learned, William S. *The American Public Library and the Diffusion of Knowledge*. New York, Harcourt, 1924, vii, 89p.
- 2) Douglass, Paul. *Teaching for Self-Education: As a Life Goal*. New York, Harper & Brothers, 1960, p. 24.
- 3) 主な先行研究には次のようなものがある。
 (a) Williams, Patrick. 『アメリカ公共図書館史：1841年－1987年』 [The American Public Library and the Problem of Purpose] 原田勝訳，勁草書房，1991, vii, 209p.
 (b) Monroe, Margaret E. *Library Adult Education: The Biography of an Idea*. New York, The Scarecrow Press, 1963, 550p.
 (c) Lee, Robert Ellis. *Continuing Education for Adults through the American Public Library 1833－1964*. Chicago, American Library Association, 1966, ix, 157p.
- 4) Stubblefield, Harold W. *Towards a History of Adult Education in America: The Search for a Unifying Principle*. London, Croom Helm, 1988, p. 27.
- 5) この二つのサービスに関して次の論文に詳しく論じられている。アメリカナイゼーションについては、小林卓「今世紀初頭のアメリカにおける移民へのサービス：アメリカナイゼーション運動との関わりで」『社会教育学・図書館学研究』No. 17, 1993, p. 23－33.、読書相談サービスについては、下村陽子「アメリカ公共図書館における読書相談業務の展開」『図書館学会年報』Vol. 36, No. 2, June 1990, p. 49－58.
- 6) Kett, Joseph F. *The Pursuit of Knowledge Under Difficulties: From Self-Improvement to Adult Education in America 1750－1990*. Stanford, Calif., Stanford University Press, 1994, p. 334.
- 7) Stubblefield, *op. cit.* 4), p. 25.
- 8) Kett, *op. cit.* 6), p. 334-335.
- 9) Stubblefield, *op. cit.* 4), p. 23.
- 10) Kett, *op. cit.* 6), p. 335.
- 11) (a) Cartwright, Morse Adams. *Ten Years of Adult Education: A Report on a Decade of Progress in the American Movement*. New York, The Macmillan Company, 1935, p. 87.

- (b) Kett, *op. cit.* 6), p. 335–336.
- 12) Stubblefield, *op. cit.* 4), p. 25–26.
- 13) ラーネットの経歴については以下の資料を参考にした。
- (a) Bobinski, George S. “Learned, William Sethchel” *Dictionary of American Library Biography*. Bobinski, George S. et. al. ed. Littleton, Colo., Libraries Unlimited, 1978, p. 305.
- (b) Douglass, *op. cit.* 2)
- 14) Douglass, *op. cit.* 2), p. 9.
- 15) *Ibid.*, p. 20–27.
- 16) Learned, William S. and Bagley, William C. *The Professional Preparation of Teachers for American Public Schools: A Study Based Upon an Examination of Tax-Supported Normal Schools in the State of Missouri*. New York, The Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching, 1920, xix, 475p. (Bulletin Number Fourteen)
- 17) Learned, William S. *The Quality of the Educational Process in the United States and in Europe*. New York, The Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching, 1927, x, 133p. (Bulletin Number Twenty)
- 18) Douglass, *op. cit.* 2), p. 27.
- 19) *Ibid.*, p. 15–23.
- 20) Learned, *op. cit.* 1), p. 3–4.
- 21) *Ibid.*, p. 6–7.
- 22) *Ibid.*, p. 7–8.
- 23) *Ibid.*, p. 9–11.
- 24) *Ibid.*, p. 11–12.
- 25) *Ibid.*, p. 12–13.
- 26) *Ibid.*, p. 13.
- 27) *Ibid.*, p. 13–14.
- 28) *Ibid.*, p. 15.
- 29) *Ibid.*, p. 17.
- 30) *Ibid.*, p. 17–19.
- 31) *Ibid.*, p. 19–20.
- 32) *Ibid.*, p. 21–25.
- 33) *Ibid.*, p. 26.
- 34) *Ibid.*, p. 27–29.
- 35) *Ibid.*, p. 31–32.
- 36) *Ibid.*, p. 32–33.
- 37) *Ibid.*, p. 33–34.
- 38) *Ibid.*, p. 36.
- 39) *Ibid.*, p. 36–37.
- 40) *Ibid.*, p. 38.
- 41) *Ibid.*, p. 38–39.
- 42) *Ibid.*, p. 40.
- 43) *Ibid.*, 40–45. アメリカナイゼーション・プログラムについては小林論文に詳しい。小林はアメリカナイゼーションを「アングロ・サクソン系の血統, 民族, 文化を強調する立場から行なわれる」狭義のものと「民主主義等を身につける『市民性』習得を強調する立場から行われる」広義のものに分け, 1910年から1920年のアメリカ公共図書館のサービスの多くが広義のアメリカナイゼーション運動を標榜していた点を評価している。(小林, 前掲書, 5), p. 26–27.) ラーネットはレポートにおいてシカゴ公共図書館のサービス事例を紹介するに留まり, ラーネット自身のアメリカナイゼーションと図書館のかかわりについての見解を明らかにしていない。従ってラーネットが図書館におけるアメリカナイゼーション・プログラムを広義のものとみていたのか狭義のものとみていたのかについては, レポートの記述のみから判断することはできない。
- 44) *Ibid.*, p. 46–47.
- 45) *Ibid.*, p. 51–52.
- 46) *Ibid.*, p. 52.
- 47) *Ibid.*, p. 53.
- 48) *Ibid.*, p. 53–54.
- 49) *Ibid.*, p. 54.
- 50) *Ibid.*, p. 55.
- 51) *Ibid.*, p. 56.
- 52) *Ibid.*, p. 69–70.
- 53) *Ibid.*, p. 76.
- 54) *Ibid.*, p. 78–79.
- 55) *Ibid.*, p. 79–80.
- 56) Monroe, *op. cit.* 3)(b), p. 29.
- 57) Douglass, *op. cit.* 2), p. 24.
- 58) Learned, *op. cit.* 1), p. 15–17.
- 59) チャーチウェル (Charles D. Churchwell) はラーネットの図書館員の専門教育と継続教育についての提言がカーネギー財団の図書館教育政策に影響を与えたことを指摘し, ラーネットの図書館学教育に対する貢献を論じている。Churchwell, Charles D. *The Shaping of American Library Education*. Chicago, ALA, 1975, p. 63–66. (ACRL Publications in Librarianship, no. 36)
- 60) Cartwright, *op. cit.* 11)(a), p. 141–142.
- 61) ALA, The Commission on the Library and Adult Education. *Libraries and Adult Education*. Chicago,

- go, ALA, 1926, p. 19–20. レポートの該当箇所は Learned, *op. cit.* 1), p. 6–7.
- 62) Monroe, *op. cit.* 3)(b), p. 142–143.
- 63) *Ibid.*, p. 29–30.
- 64) Cartwright, *op. cit.* 11)(a), p. 87.
- 65) (a) Monroe, *op. cit.* 3)(b), p. 30.
(b) [Editorial] *Library Journal*. Vol. 49, No. 16, Sep. 15, 1924, p. 786.
- 66) Monroe, *op. cit.* 3)(b), p. 29.
- 67) Williams, *op. cit.* 3)(a), p. 62–63.
- 68) Stubblefield, *op. cit.* 4), p. 25–26.
- 69) Rayward, Boyd. “Reconstructing and Mobilising Information in Documents: A Historical Perspective,” *Conceptions of Library and Information Science: Historical, Empirical and Theoretical Perspectives*. Vakkari, Pertti and Cronin, Blaise eds. London, Taylor Graham, 1992, p. 62.
- 70) Bobinski, *op. cit.* 13)(a), p. 305.
- 71) Lee, *op. cit.* 3)(c), p. 47.
- 72) Monroe, *op. cit.* 3)(b), p. 29.
- 73) Stubblefield, *op. cit.* 4), p. 24.
- 74) 吉田右子「A. S. Johnson の図書館成人教育論：The Public Library: A People's University を中心に」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第36巻，1996, p. 496–497.

W. S. Learned's Thought on Public Library : A Study of “Community Intelligence Center”

Yuko YOSHIDA

University of Library and Information Science

During 1920s, American public libraries have started educational services. In 1924, W.S. Learned, who was a research staff of the Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching, wrote *The American Public Library and the Diffusion of Knowledge*.

In his book, he envisioned public library as community intelligence center which had a responsibility to answer various information questions of the community. Learned brought thoughtprovoking model for future development of the American public library.

As the result of this study, it was found that Learned vision of library service showed new dimension for adult education and community service and his discussion on librarianship gave foundation of adult service in our time.